夏草──「おくのほそ道」から（松尾芭蕉）の教材研究　　　　　　　　　平野博通

１

　月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の関越えむと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松島の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲りて、杉風が別墅に移るに、

　草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

面八句を庵の柱に懸け置く。

（現代語訳）

月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、過ぎ去っては新しくやって来る年もまた旅人に似ている。一生を舟の上で暮らす船頭や、馬のくつわを取って老年を迎える馬子などは、毎日毎日が旅であって、旅そのものを自分のすみかとしている。（風雅の道に生涯をささげた）昔の人々の中にも、旅の途中で死んだ人が多い。私もいつの頃からか、ちぎれ雲のように風に誘われて、あてのない旅に出たい気持ちが動いてやまず、（近年はあちこちの）海岸をさすらい歩き、去年の秋、隅田川のほとりのあばらやに（帰り）、蜘蛛の古巣を払って（住んでいるうちに）、しだいに年も暮れ、新春ともなると、霞の立ちこめる空の下で白河の関を越えたいものだと、そぞろ神が乗り移ってただもうそわそわとさせられ、道祖神が招いているようで、何も手につかないほどに落ち着かず、股引の破れたところを繕い、道中笠のひもを付け替え、三里に灸をすえる（など旅の支度にかかる）ともう、松島の月（の美しさはと、そんなこと）がまず気になって、今まで住んでいた庵は人に譲り、杉風の別荘に移ったのだが、

　草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

　（元の草庵にも、新しい住人が越してきて、私の住んでいた頃のわびしさとはうって変わり、華やかに雛人形などを飾っている。）

面八句を、（門出の記念に）庵の柱に掛けておいた。

１、紀行文の読み方

　「おくのほそ道」は俳諧紀行文、つまり旅をしながら日記および俳句を残していったような作品である。実際には現地で書いたというよりは、旅から戻ってからまとめた創作文であろうが、基本的には、出来事があった順序で書かれている。

　読みの方向としては、それぞれの土地で、芭蕉がどのような思いをもって、俳句を詠んだかを読み取らせていきたい。紀行文と俳句がどのように関わっているかを考えさせることで、読み取れるものと考える。

　記録文に近く、時の経過や場所の移動を軸にして読み取っていけるが、俳句に主題が集約されるという点で、記録文とは区別できる。また、小説でいうところのクライマックスが俳句に当たるのかもしれない。

２、構造よみ

出来事が起こった順序、つまり時の順序で構造を読むと、以下のようになる。

①月日は・・・（旅の説明）

②予もいづれの・・・（旅への思いの高まり）

③去年の秋・・・（行動に移し）

④やや年も暮れ・・・

⑤春立てる霞の空に・・・（旅に出たい）

⑥住める方は・・・（庵を出て、移り住み）

⑦表八句を・・・（俳句をかけて出発）

あえて、小説の構造のように解釈すると、

冒頭　月日は・・・旅の説明

発端　予も・・・自分の思い

山場の始まり　去年の秋・・・

クライマックス　草の戸も・・・

結末・末尾　・・・懸け置く。

のようになる。つまり、クライマックスである俳句に向けて、その俳句への思い（＝旅への思い）がどんどん高まっていくさまを描いているのである。

　だとすれば、この作品で読みとるべきポイントは、芭蕉が旅をどのようにとらえているか、それをどのように行動に移しているか、その思いをどのように俳句にしたか、であろう。それらを形象よみしていきたい。

３、形象よみ

冒頭を一文ずつ区切ってみる。

①月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。

月日⇔行きかふ年

百代の過客⇔旅人

のように、対句になっている。まとめると「時は旅人のようなものだ」と言っている。

②舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとす。

舟の上に生涯を浮かべ⇔馬の口とらへて老いを迎ふる

これも対句である。船頭も馬子も旅で年老いていく。旅を生活としている。「舟」と「浮かべ」は縁語である。

③古人も多く旅に死せるあり。

西行・宗祇・杜甫・李白ら旅に死んだ古人もたくさんいる。芭蕉は旅を生業とする生き方を理想としていた。

　では芭蕉の旅への思いはどのようなものなのか。

①予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、

「予も」は「古人も」に対応する。旅に死んだ古人のように自分も決意して旅に出ようとしている。

こののにも気をつけさせたい。「が」と置き換わる主語を表す。ちぎれ雲が風に誘うわれるようにふらふらと旅に出かける。

②漂泊の思ひやまず、

漂白ではない。波間に漂うようなあてのない旅である。「漂泊の思ひ」は芭蕉の旅のキーワードである。

③海浜にさすらへて、

前の旅で海岸をさすらって、いよいよ旅の行動を起こす。

④去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、

出発は春であるが、半年も前から旅の準備が始まっていたことが分かる。まず、古い家に移り住んでいる。

⑤やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の関越えむと、

年が暮れ、立春になって、ここは「春立てる」が立春の意味と「立てる霞」という掛詞的に使われている。

⑥そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず、

旅に出たくてそわそわして落ち着かない。そんな気持ちを神様のせいにしている。

⑦股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、

いずれも旅の準備である。

⑧松島の月まづ心にかかりて、

東北地方の行ってみたい名所としてあげている。

⑨住めるかたは人に譲りて、杉風が別墅に移るに、

　いよいよ出発のために、家を払っている。

ここまで見ると、芭蕉が旅に出たくて仕方がない心情が行動に表れ、旅の準備を行い、いよいよ出発だという盛り上がりが見られる。

４、主題よみ

　俳句から主題を読み取っていく。

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

粗末な小屋も新しい住人が引っ越してきた。わびしい自分と違い、華やかなひな人形を飾っている。雛はひな人形で春の季語。

この俳句を読み取るためには、「雛の家」でひな人形が飾られている華やかさと「草の戸」というわびしさが対比しており、住む人が変われば、家の雰囲気も変わるものだと。「住み替はる代ぞ」の「ぞ」は切れ字であり、ここに芭蕉の感動の中心がある。住み替わってしまうとこうも変わってしまうものなのだと。

これまでの紀行文と関連づけてよむと、「月日」「年」など時は旅人のようなものだと言ったことは、この俳句では、「住み替はる代」が時の流れのはかなさを表している。

「草の戸」は「江上の破屋」を表している、芭蕉は「杉風が別墅」に移り、自分は旅をすみかとしているから家は仮のすまいであると。移り住むものであることを表している。しかし、移り住んだ後にやってきた人は自分とは全く違うタイプの家族だった。それもまたよいのではないか。

面八句（おもてはちく）を庵の柱に懸け置く。

門出の記念に面八句を庵の柱にかけて出発した。

５、吟味よみ

古典は完成されており、長い間受け継がれているわけだから、否定的な評価はしづらいだろう。

まずは現在の生活からはわかりにくい疑問を出すこと。そして、長く受け継がれてきている、肯定的な部分、つまり評価的な吟味よみが必要だと考える。すぐれた表現を出させることに意味がある。

（予想される疑問点）

・なぜ芭蕉は旅に出たかったのか

・なぜ舟と馬なのか

・なぜ時の流れと旅を関連づけたのか

・場所を表す言葉、「海浜」「江上の破屋」「白河の関」「松島」「住めるかた」「杉風が別墅」などは何を意味しているのか

・なぜ旅立つ前に引っ越すのか

（予想される評価的吟味）

・対句を使った表現のすばらしさ

・旅への思いが徐々に募っていく書き方

・古典や古人を念頭においた文章

・紀行文が俳句に集約される書き方

・ところどころで具体的な地名を出して、読者のイメージを引き出す工夫

６、授業化にあたって

紀行文で描かれている言葉の一語一語が俳句にどのようにつながっていくのかを読み取らせたい。

２

　三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ、高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は、和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠もり、功名一時の草むらとなる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と笠打ち敷きて、時のうつるまで涙を落としはべりぬ。

　夏草や兵どもが夢の跡

　卯の花に兼房見ゆる白毛かな　曾良

　かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散り失せて、玉の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の草むらとなるべきを、四面新たに囲みて、甍を覆ひて風雨を凌ぎ、しばらく千歳の記念とはなれり。

　五月雨の降り残してや光堂

俳句に向けて芭蕉の思いがどのように高まっていくのかは、俳句の言葉に関連する言葉を線引きしていくことで読み取っていくことばできる。

例えば「草の戸」に向けて、「江上の破屋」、「住み替はる代ぞ」に向けて、「旅をすみかとす」という旅の一般論から、芭蕉の行動である「住めるかたは人に譲りて」とつながっていく。

読みのイメージとしては、小説のクライマックスに向けて形象が積み重なっていくように、最後の俳句にイメージが重なっていくのである。

旅というものは「すみか」を移す行為であるが、誰かがすみかを移すということは他の誰かがそこに住み着くということを意味する。それは「日々旅にして旅をすみかとす」芭蕉の理想の生き方である。「住み替はる」つまり引っ越すことと旅のイメージをかさねて、旅同様、全く知らない人と行き交うことを楽しんでいる。

夏草──「おくのほそ道」から（松尾芭蕉）の教材研究その２

１、構造よみ

冒頭　三代の・・・

発端　まづ高館に・・・

山場のはじまり　さても義臣・・・

クライマックス　夏草や・・・

エピソード　かねて・・・

小クライマックス　五月雨の・・・

結末・末尾　・・・光堂

大きく分けると前半は平泉の様子が描かれ、後半は光堂の様子が描かれている。ともに芭蕉の句が最後にあるが、前半の最後には弟子の曾良の句も添えられている。

　紀行文であるため、時と場が移っていく様子を読み取らせたい。場所を表す言葉は以下の通りある。

①大門の跡は一里こなたにあり

②秀衡が跡は田野になりて

③金鶏山のみ形を残す

④まづ、高館に登れば

⑤北上川

⑥南部

⑦衣川

⑧和泉が城

⑨泰衡らが旧跡

⑩衣が関

⑪南部口

⑫この城

⑬二堂

⑭経堂

⑮光堂

高館には実際に登っているが、その他の場所は遠くから眺めていたり、過去を想像したりしているものである。

①②③で奥州藤原三代の歴史を思い起こし、④で実際に高館に登って、⑤～⑪の景色を見下ろして想像している。⑫のこの城とは高館である。後半⑬「二堂」とは⑭「経堂」と⑮「光堂」のことである。

２、形象よみ

①三代の栄耀一睡のうちにして、

奥州藤原三代の栄耀も一眠りするくらいあっという間の短さであった。

②大門の跡は一里こなたにあり。

栄華を示す大門の跡は一里（４キロ）こちらにあるぐらい大規模なものだった。

③秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。

三代目秀衡の屋敷跡は今や田になっているが、金鶏山のみ形を残している。人工物は形をなくしても自然物は残っている。

④まづ、高館に登れば、

平泉に来て真っ先に高館（源義経の屋敷跡）に登ってみると。

⑤北上川南部より流るる大河なり。

大河とは北上川である。南部は南の方でなく、地名である。岩手県南部地方である。北上川は南部地方から流れてくる大河である。となる。

⑥衣川は、和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。

衣川は、和泉が城をめぐって、高館の下で、北上川に合流している。（高館から見下ろしている）

⑦泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。

泰衡らの旧跡が衣が関を隔てて南部口で、蝦夷を防ぐように見えている。

⑧さても義臣すぐつてこの城に籠もり、功名一時の草むらとなる。

源義経がけらいを選りすぐって高館に立てこもった戦いも、手柄をたてたのもつかのまで、あとは草むらとなってしまっている。

⑨「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」

杜甫の「春望」からの引用である。「草木ふかし」が原典であるが、芭蕉は改作している。戦で国は荒れ果ててしまっても、山や河など自然は残っている。町（城は中国では町のこと）は春となって、草木も青々としている。という意味だが、その情景が今まさに目の前に広がっている。かつて栄えた平泉も屋敷などはなくなり、山だけが当時のまま残っている。

⑩と笠打ち敷きて、時のうつるまで涙を落としはべりぬ。

芭蕉は笠をしいて、長い間ずっと涙を落とし続けている。義経の時代の戦に思いをはせているのだろう。

⑪夏草や兵どもが夢の跡

夏草は現在目の前に広がる自然である。かつての戦で兵士たちが夢見たことも、今となっては跡しか残っていない。季語「夏草」で青々と茂っている様子を伝え、「や」の切れ字で夏草が生い茂っている様子に感動していることを表現している。時代が変わっても季節が夏になると、自然と草は生えてくるが、栄えた人々の屋敷はいつまでも残っているものではない。当時の人々の夢は跡でしかない。そこに芭蕉は寂しさを込めている。紀行文の「金鶏山」「田野」「功名一時の草むら」などが「夏草に」集約され、「三代の栄耀」「大門の跡」「秀衡が跡」「高館」「和泉が城」「泰衡らが旧跡」「衣が関」「南部口をさし固め、夷を防ぐ」「義臣」「城に籠もり」「功名」などが「兵どもが夢の跡」に集約されている。

⑫卯の花に兼房見ゆる白毛かな　曾良

弟子の曾良が同じ場所で詠んでいる。「卯の花」は白い花、義経とともに戦った兼房の白髪に見えるようだとうたっている。季語は「卯の花」で夏。「かな」が切れ字で、「白毛」を振り乱して義経を守って戦う兼房の様子に感動の中心をおいている。

芭蕉の「夏草」と「卯の花」が、「兵ども」と「兼房」が、「夢の跡」と「白毛」がそれぞれ対応している。

⑬かねて耳驚かしたる二堂開帳す。

「耳驚かす」とは知るというぐらいの意味である。「二堂」とは「経堂」と「光堂」である。それらが「開帳」すなわち一般に公開されたのだ。

⑭経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。

経堂の説明として、三将の像すなわち藤原三代の仏像が残されていること、光堂の説明として、三代の棺を納め、安置（ミイラ化）している。

⑮七宝散り失せて、玉の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の草むらとなるべきを、

装飾品もなくなり、扉も破れ、柱も壊れてしまい、頽廃空虚の草むらとなる。平泉の段の「草むら」と共通点がある。栄華の跡であろう。

⑯四面新たに囲みて、甍を覆ひて風雨を凌ぎ、しばらく千歳の記念とはなれり。

四面を囲んだのは、現在でも金色堂を覆っている「鞘（さや）堂」である。「しばらく」「千歳」はその建物ももつのであろうが、人工物はやがては朽ちてしまう。それに対する自然の悠久さは杜甫の詩のテーマでもある。

⑰五月雨の降り残してや光堂

季語は「五月雨」で夏。五月雨つまり梅雨の雨である。梅雨はものを腐らせるという。その梅雨も神々しい光堂だけは、鞘堂があるために、降り残して、腐らないようになっている。「や」が切れ字で、そこだけぬれずに光り輝いている光堂のすばらしさを感動をもって詠んでいる。

３、主題よみ

⑪で「夏草や・・・」の俳句について述べたように、時代ともに変化していくものに対するあわれさを詠んでいる。栄華のはかなさ、自然と人工物の対比、時代の変化などがテーマになっている。

４、吟味よみ

（予想される疑問点）

・芭蕉は平泉に来てなぜ真っ先に高館に登ったのか。

・平泉でなくなってしまったものと残っているものには何がある。

・芭蕉はなぜ涙を流したのか。

（評価的吟味）

・中国の詩を引用した文章

・紀行文が俳句に集約される書き方

・弟子の俳句を添えてテーマを補強

・具体的な史跡を出して、読者のイメージを引き出す工夫

５、授業化にあたって

　やはり俳句に向けてどのように芭蕉の思いが高まっていくかをとらえさせたい。

　「夏草や」に向かって、「金鶏山」「田野」「草むら」など、荒れ果てた自然のイメージがある言葉がつながっていく。「兵どもが」に向かっては、「三代」「秀衡」「泰衡」「義臣」などかつて平泉で活躍した藤原氏や義経の家来がイメージされる。「夢の跡」に向かっては、「三代の栄耀」「大門の跡」「秀衡が跡」「高館」「和泉が城」「泰衡らが旧跡」「衣が関」「南部口をさし固め、夷を防ぐ」「城に籠もり」「功名」など様々な活躍ぶりが描かれているが、今となっては「草むら」となってしまっている。そのように人の活躍は短い時間で移り変わってしまうが、自然の悠久さの前では、あっという間の出来事であることが描かれている。

　ちなみに曾良の俳句も同じ主題を読んでいる。